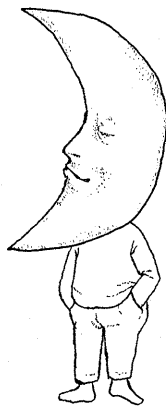


『平家物語』にみえる 一つの話をめぐる

山添 昌子



平安時代の末におきた源平の兵乱・興亡ひょうしん・こうまうをおもな素材にしている『平家物語』が、何時、誰により、どのような場で編まれたのかは、今日でもまだほとんど判っていない。私は大勢の人々が登場し、やがてはみんな死んでいってしまうこの物語が、どうして今の姿になったのであろうかということを究めたいと、長い間こだわり続けている。『平家物語』が作られた背景の一端を、「乳母めとのふところ」に顔を入れる幼い子の話を通して考えてみたい。

（『屋代本平家物語』角川書店と新潮日本古典集成『平家物語』の本文を用いる）

その翌日、呼び出された子はふたたび父に会えるかと喜んで出かけて行く。だが、着いた所は河原の敷皮の上であつた。父を探す子に、太刀を持って寄る武士。無邪気な子は殺されるなどとは夢にも思わず、泣きやむようにとおどすのかと思ひ、泣くまいと我慢して「乳母のふところ」へ顔を入れてゐるのである。父、母のふところ代わりともいえる「乳母のふところ」へ入り込む幼な子の様を読んで、私は乱世に生きる敗將の息子でなければ、と運命の悲劇に思ひをいたすのであつた。この無邪気で無心な子は、物語の上ではこの時に殺されてしまう。もし魂というものがあるならば、思ひもかけないこの無残な事態をこの幼い子は何と感ずるであらうか。あの世での子の心を思うと悲しいまでに恐ろしい。

『平家物語』にみえる宗盛の子息についての話は、「乳母のふところ」にこと寄せて、大事に育てられた幼児が人と時代のはざまに落ち入り、思いもかけない悪意をあびて、命を失ってしまうことの恐ろしさ、無残さを私達に訴えているのである。ではこの恐怖感は、源平の兵乱以後何時、どこ場で最も強く感じられていたのであろうか。

ある日、『法隆寺別当次第』の記述が私の目をひいた。それによると、平家一門が滅亡して五十年近くの歳月が過ぎた天福二年（一二三四）頃より、南都の法隆寺で摂関家の一つである九条家が聖徳太子御影や太子曼陀羅などの画像を描かせて、供養につとめている。そして、保元から承久までの乱世の天皇達にまつわる死霊や佐渡に流されている順徳院の生霊などを鎮めようとしている。この時期、九条道家のむすめが産んだ幼い四条天皇が位についているのだが、天皇の母は次の子の出産に際して子とともに死去してしまっている。九条家出身のむすめからの皇嗣誕生は当分なくなった中で、道家は、幼い孫の四条天皇が無事に成長することを必死に祈り、大がかりな鎮魂の供養を行っていたのであろう。

九条道家は、無心な孫の四条天皇の姿を見るにつけ、無邪気な童子であった平家一門の棟梁の子息が無残に殺されてしまったことに深い恐れを抱いたものであろう。この子の死霊も孫の天皇にとりつかないようにと、魂鎮めを行っていたにちがいない。宗盛の子につ

大橋 利恵子

(女子聖学院短大非常勤講師)

— 38 —